

第2章 銃後

銃後の暮らし③【北海道・札幌】

思わずしがみついたリンゴの木

坂東夫佐子さんのお話から

○二十五連隊 正式名称「歩兵第二十五連隊」。北海道の第七師団のうちの

一つ。明治二十九年、前身の独立歩兵大隊が札幌郡月寒村におかれ、明治三十二年（一八九九年）二十五連隊が創設された。以後、日露戦争をはじめ、中国大陸などに出兵。樺太（サハリン）にて終戦を迎える。

○高等科 昭和十六年三月一日の国民学校令で、それまでの尋常・高等小學校を、国民学校初等科（六年制）、高等科（二年制）と改称し、高等科修了（十四歳）までの義務教育は実施されなかった。

私の家では、父が、昭和十二年（一九三七年）に二十五連隊（月寒）に召集されて入隊しました。その時、私は十歳でした。

私は厚別尋常小学校に通っていましたが、体育の授業のある日は、なぎなたで突く練習ばかりさせられました。運動会もその練習。来る日も来る日も、なぎなたの練習ばかりです。「勝つまで欲しがりません」という教育でした。

それから、学校で蚕を飼われました。蚕当番というのがあって、子どもたちが順番に当番にあたりました。道路縁や川縁に桑の葉があつて、それを取りに歩かされました。夜になると、蚕がしゃしゃしゃとその桑の葉をたべる音が聞こえるのです。この蚕がつくった絹糸から、落下傘をつくったのです。

もう一つ、飛行機の燃料が足りないのです、ヒマを植えました。今は神社の駐車場になっているところにヒマを植えて、青年団で管理したのです。油がないのでヒマから油を作ったのです。

出征兵士の家が人手不足になるので、高等科のころは勤勞奉仕に行きました。田植えなどの手伝いをするのです。学校も、田植えや稲刈り時期になると休みになりました。子どもたちは労働力になるので、学校を休ませるのです。

昭和二十年は大変な凶作で、米に実が入りませんでした。うちは、米半分、芋半分のご飯でした。あのころの食料事情と比べたら、今は、天国よりまだ上でしょう。今の子どもたち

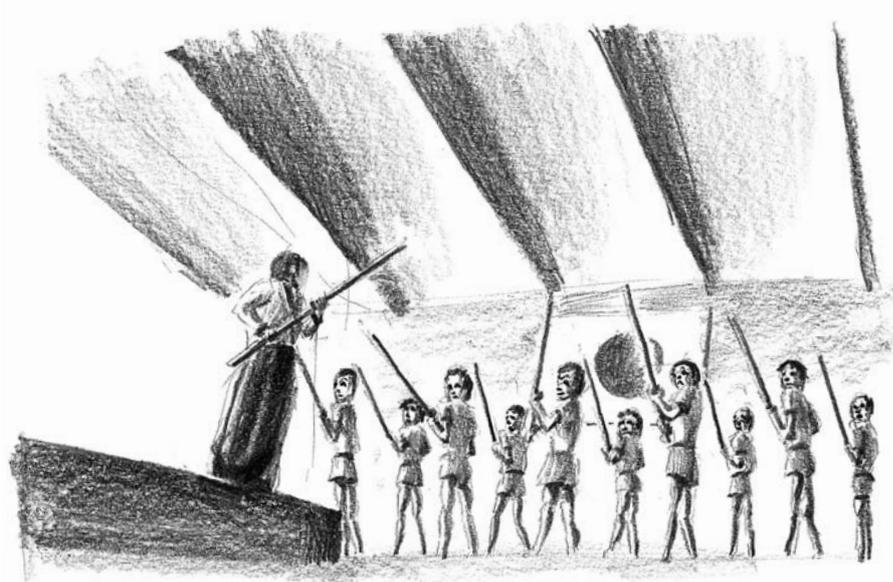
が「おかずがどうのこうの。」と言うと、「何を言っているの。昔は米飯だってお正月しか当た
らなかつたんだよ。」と言ったことがあります。

昔、現在の国道三六号線の平岡二条四丁目から五丁目のあたりに、第二十五連隊の演習場
がありました。月寒中央通四丁目から五丁目に兵舎があつて、そこから、歩いて演習に来る
のです。私たちも学校の行き帰りに、兵隊さんと会ったりもしました。父が二十五連隊に入
隊していましたから、私のおばあさんが「兵隊さん
はお腹が空くから。」と言って、大豆を炒って、それ
に砂糖を絡めて、兵隊さんのところに持って行って渡
したことがあります。うちは農家だから大豆がとれ
たのです。

確か、昭和十八年だつたと思いますが、知っている
人はあまりいませんが、二十五連隊の演習場に飛行
機が落ちたこともありました。私が高等科を卒業し
た年、燕麦まきをしていたときに、何か頭の上をすつ
と飛んできたのです。演習場のところ、今の平岡公
園の近くで、ちよつと上が源流になつているところ
でした。私たちは走って見に行きました。衛生兵も
駆けつけて、具合を診ていましたが、その人はどうや
ら無事だつたようです。

近所では、志願して海軍に入隊した方がいました。

思わずしがみついたリンゴの木



なぎなたのけいこ

イメージ図

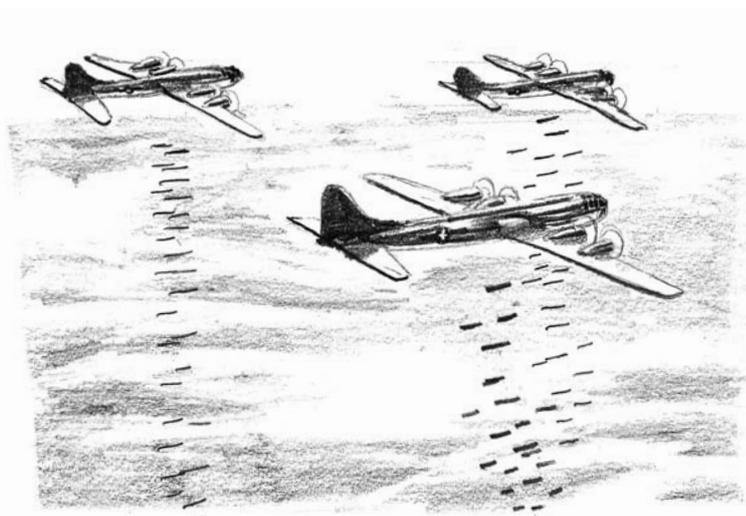
○軍艦武蔵 戦艦大和と
ならば、日本最大の戦艦。昭和十九年（一九四四年）、フィリピン沖海戦に参加し、アメリカ軍航空機の攻撃を受け、フィリピンのシブヤン海で沈没。

私より学年が上の方でした。その方の話では、もう毎日ビンタの繰り返しで、しかも頭をたたかないで、スリッパで尻を叩かれるのだそうです。その方は、家に帰ってきて、こんなにあるがたい世の中があるのかと思っただけです。それくらい、すぐスリッパでビンタされてしまうような生活だったそうです。

昭和二十年頃からは、いよいよB29やグラマンが頭の上を飛んでくるようになりました。グラマンが、飛んでくると、私らはリングゴの木みぎの幹みきにしがみついて、飛行機が去っていくのを祈りながらひたすら待つのです。人の影を見たら機銃掃射されるからです。あのころに丘の飛行場も空襲にあつて、やはり機銃掃射されました。

ちようどうちのリングゴ畑の上をグラマンが飛んでいったときは、もうおそろしくて、おそろしくて、ただひたすらリングゴの木にしがみつきました。グラマンが飛んできた時は、もう本当に生きた心地がしませんでした。

父もそうでしたが、父の弟も兵隊に行きました。その時は本当につらかったです。兵隊にいく時は、家族全員で札幌駅まで歩いて見送りに行きました。小さくて、まだ背中に背負って歩く子どもがおりました。叔母が泣いて、泣いて。いま思い出しても、涙が出ます。だから、うちでは父の時よりも、父の弟の方がかわいそうでした。父の弟はフィリピン沖のシブヤン海というところで、軍艦武蔵に乗っていたのですが、昭和十九年十月二十四



イメージ図

B29

○特攻隊 特別攻撃隊。陸海軍の航空機・小艇による敵空母・艦船への体当たり戦法を行う攻撃部隊。一九四四年、戦艦の零戦に二五〇キロ爆弾を抱かせる攻撃が海軍の組織的戦法として採用され、「神風特別攻撃隊」と名付けられた。その後、陸軍も特攻隊をくりだし、以降は特攻隊が航空攻撃の中心となった。また、航空機のほか小艇による特攻隊や人間魚雷「回天」などによる特攻攻撃も行われた。

日に、その武蔵が沈没して戦死しました。遺骨も戻ってきませんでした。船が沈んでしまったので、遺骨などないのです。陸の上で亡くなった方だと遺骨があります。中には、自分のものか他人のものか分からないのものもあるかもしれませんが、ある程度のもものはありました。しかし、父の弟のお骨箱の中にはなにも入っていませんでした。ただ、「何月何日死亡」という紙きれ一枚だけです。箱だけ来たのです。

軍艦武蔵には、二千人以上が乗っていたのですが、生きて帰ってきた人が軍艦武蔵会というのを作ってくれています。三十三回忌の時に、遺族とお坊さんと神主さんを連れて、フィリピンまで行ったのです。船で、武蔵が沈没したところまで行って、神主さん、お坊さんがそこでお経を上げました。生前好物だったものを遺族の皆さんが海に投げ、慰霊祭をして帰ってきました。また、フィリピンに特攻隊の基地があったのですが、そこにも連れて行ってもらいました。今はサトウキビ畑になっていました。ここからみんな一人ずつ飛行機に乗って行ったのです。でも、「天皇陛下万歳」ではなくて、みんな「お母さん、行きます。」と言って行ったそうです。「行って来ます。」ではなくて、「行きます。」です。敵の軍艦に突っ込むわけですから、帰って来られないのです。そういう話もうかがいました。平和な世の中になって、こんなありがたいことはないと思っっています。あのリンゴの木にしがみついたことは、今でも忘れられません。戦争だけは、二度と起こしてはいけません。本当にそう思います。

DATA

平成20年度清田区平和事業

聴き取り

- ・平成20年12月18日
- ・清田区役所



坂東夫佐子(ばんどう・ふさこ)さん

- ・昭和4年(1929年)生まれ
- ・札幌市清田区在住

思わずしがみついたリンゴの木